

オーストラリアの文化的多様性とJudith Wrightの詩（1） — “Two Dreamtimes” と “For a Pastoral Family” —

A Study on the Cultural Diversity of Australia in Judith Wright's Poetical Works(1) — “Two Dreamtimes” & “For a Pastoral Family” —

(2011年3月31日受理)

橋内 幸子 佐生 武彦 大橋 典晶 竹野純一郎
Sachiko Hashiuchi Takehiko Saiki Noriaki Ohashi Junichiro Takeno

Key words : Judith Wrightの詩, オーストラリアの文化の多様性, アボリジニーのDreamtimeとDreaming, 開拓民と移民文化

抄 録

Judith Wright(1915-2000)は現代オーストラリアを代表する女流詩人である。本稿では、彼女の詩に表現された、二つの‘dreamtime’と‘dreaming’を見ていく。即ち、“Two Dreamtimes”におけるアボリジニーの‘dreamtime’と‘dreaming’の意義、そして、“For a Pastoral Family”に描かれた白人移民の初期(白人にとっての‘dreamtime’)と現代の人間像を語る詩人の‘dreaming’が、いかなる意味を持っているかを考察する。アボリジニーと白人移民の双方の精神遺産が現代詩に刻印される時、文字を持たなかったアボリジニーの文化には文字の力が付与され、白人移民の歴史は神話化されることになる。

I. はじめに

オーストラリアの、国家としての独立は1901年のことである。しかし、18世紀後半、この大陸をヨーロッパ人が‘発見’し、白人移民がやってくることになって以来、原住民アボリジニーに対する略奪と殺戮、そしてさまざまな弾圧や偏見は現代まで続いた。

オーストラリアの歴史を背景にした、最近の映画は、さまざまな白人移民とアボリジニーとの間の軋轢や、白人移民達の富への欲求などを描き出している。文字よりも映像の方が一度に与える情報量が多いためでもあるが、全体像を知るためには役立つ。特に「裸足の1500マイル」(2002)では、白人の優位性を信じて、アボリジニーと白人との混血の子どもをアボリジニーの母親から引き離して教育するという制度への批判がテーマである。それらの子どもたちは‘盗まれた世代’と呼ばれている。また、「オーストラリア」(2008)では、広大な土地と家畜(牛)の所有をめぐる、ヨーロッパからの移民同士が争

うという構図の中に、白人移民の夢と挫折が見て取れる。

II. 原住民アボリジニーのdreamtime

1. “Two Dreamtimes” とアボリジニー

Alive(1973)に収録された“Two Dreamtimes”の詩行は、オーストラリア原住民アボリジニーの友人に対するJudith Wrightの謝意から始まっている。

Kathy my sister with the torn heart,
I don't know how to thank you
for your dreamtime stories of joy and grief
written on paperbark.¹⁾

詩のタイトルの下に(For Kath Walker)と記されているとおり、詩人がこの詩を通して語りかけている人物であるKath Walker(1920-1993)は、アボリジニーとしては、特筆すべき人物である。Queensland州のStradbroke

Islandに生まれた彼女は、Oodgeroo Noonuccalという名前も持ち、詩人、政治活動家、アーティスト、そして教育者であった。特に彼女の詩はよく知られており、アボリジニーとして初めて自作の詩集を発行できた詩人である。Judith Wright の伝記を書いたVeronica Bradyによれば、Judithと彼女は、1960年代からの友人であった。²⁾

白人移民の子孫として、Wrightはアボリジニーの子ども達(the dark children)と遊ぶことを禁じられ、同胞である白人による土地の略奪や殺戮について教えてもらえなかった(they hadn't told me the land I loved/was taken out of your hands)と語る。そして、アボリジニーの女性や子どもを労働力として売り飛ばした男達の不機嫌な様子や、残虐な行為も正当化した男達の顔も描かれる。それは、彼らを買ったことを、入手したラム酒で忘れた(for rum to forget the selling) 顔であり、過去を忘れた目をした、厳格で理性的な白い顔(the hard rational white faces that forget the past)でもある。その描かれ方には、オーストラリアの白豪主義における、排他的で独善的な様相も浮かび上がる。

オーストラリアの白豪主義(White Australian Policy)の歴史は、オーストラリアへの移民の歴史と深く関わっている。それは、1770年のスコットランド人のジェームズ・クックによる領有宣言に始まり、1788年からの流刑植民地としてのイギリス人の移民が開始された。初期移民団の7割は囚人であり、その他も貧困層の人間であった。1828年には大陸全土がイギリス領となり、開拓も進んだが、同時に原住民のアボリジニーから土地を奪取し、彼らの多くを殺戮した。1850年代に金鉱が発見されると、中国系の金鉱移民に対する排斥が始まり、それが白豪主義に拡大していく。そして、オーストラリアは、1901年にイギリスから独立する。

歴史的に観ると、約5～7万年前に東南アジアから移住後、独自の神話と文化を形成しつつ、オーストラリアの自然の中で生きてきたアボリジニーが避け得なかった悲劇がある。つまり、白人による土地の略奪であり、殺戮である。その一方で、祖国イギリスから追放された群団や、新天地の夢を抱いてきた人々が直面した厳しい現実がある。乾いた厳しい風土、開拓者としての日々の労苦、国が異なる移民同士の争い。このことから、原住民になっていたアボリジニーと、イギリス等からの移民

という、この二つのグループにとって共通の状況を示す言葉と表現が考えられる。つまり、‘lost’であり、‘dreaming’である。

Judith Wrightは、この二つの言葉を巧みに使って、この詩に、彼らの状況を刻み込んだ。

you brought me to you some of the way
and came the rest to meet me,

over the desert of red sand
came from your lost country
to where I stand with all my fathers,
their guilt and righteousness.

Over the rum your voice sang
the tales of an old people,
their dreaming buried, the place forgotten...
We too have lost our dreaming.³⁾

かつて、オーストラリア全土には、700を超えるアボリジニーの部族があり、250以上の言語を使っていたが、全て狩猟採集民族であり、書き言葉を持たなかった。部族によっては、肥沃な温帯地域が多い海岸地方から、内陸部の赤い土の砂漠に追いやられた。白人移民による農耕と牧畜のためである。緑の温帯の海岸地域を離れ、内陸部を空から眺めると、二酸化鉄が含まれる赤い砂が広がる乾燥の極限とも言える風景が地平線まで続く。土地を奪われ、赤い砂漠に生きるアボリジニーと、開拓民として生きていくために略奪と殺戮という罪を正当化した白人移民の祖先達は、それぞれの‘dreaming’(アボリジニーの文化では「創世神話」)を失った(We too have lost our dreaming)のである。

2. ‘dreaming’ と ‘dreamtime’

この詩のタイトルにある‘dreamtime’と、この‘dreaming’は、アボリジニーの世界観や文化を理解する上での重要なキーワードである。‘Dreamtime’とは「創世期」であり、アボリジニーの多くの伝承文化が由来している。さまざまな言語を持つ多くの部族が神話や伝説の内容を、この時期の事柄として設定している。これ

らの伝承を民話として概観しても、その多様性は明白である。因みに、A. W. リード編の*Aboriginal Myth, Legends, and Fables*で示された分類は、次のとおりである。

○神話；

- ①偉大な父(Baiame, Nooraile, Bunjil等の神話)
- ②トーテムの先祖(虹蛇, タイパン=褐色蛇)
- ③創造(最初の男女, 川と海, 太陽・月・星, 火の発見等)

○伝説；

- ①爬虫類人, ②蛙人, ③樹木人, ④獣人, ⑤花人,
- ⑥鱈人, ⑦星人, ⑧鳥人

○作り話；

- ①死の到来, ②南十字星になった原初の人, ③ディンゴと猫, ④蠅と蜜蜂, ⑤太陽神の贈り物, ⑥大洪水,
- ⑦カンガルーとエミュー, ⑧虹蛇, 等

以上の分類から判断できることは、アボリジニーの伝承文化としての口承文化には、天地創造の他に、トーテムがあること、自然界の物と人間の合体という伝説が多いこと、オーストラリア独自の自然や生態系からの民話形成があること、等であろう。

アボリジニーのトーテムの一例として、Kath Walkerのトーテムはオーストラリアのニシキヘビの一種である無毒のcarpet snakeであり、ネズミの害を防ぐために繁殖されたこともあった。Wrightの同じ詩集の中でも、家をモチーフにした“Habitat”のⅢの冒頭部分に、多少、ユーモアを含めて、その姿が描かれている。

An eight-foot carpet-snake
used to winter in the ceiling.
We heard him roll and stretch
when the evening fire was lighted.
He left each spring
on his own affairs.
Finally
some stick-happy farmer
took him for a trophy.
That winter the rats
came back.⁴⁾

民家の天井にも住み着く蛇がいる一方で、アボリジニーの部族が信仰している虹蛇(Rainbow Serpent)は、創世

神話の中で最も重要な精霊であり、虹同様、人間の手の届かないところにいる。

虹蛇は、オーストラリアの乾燥した苛酷な大地に生きるアボリジニーにとって、水や雨を自由に操り、雨期をもたらし、神の使いとして、「死と再生」や「雨と豊穡」を支配している神聖な存在と信じられていた。虹蛇伝説によれば、雨が止み、空に七色の虹が出ると、虹蛇は新しい住みかに移ろうとしているということである。この虹蛇は、山や湖、河川を造った後、一つの湖に潜る。次に雨が降った後、陽光が射している平原では、虹蛇が潜った湖から虹が天に向かって架かっているのが見える。そして空から虹が消えると、アボリジニー達は、虹蛇が別の湖に落ち着いたと考えるのである。地上の生命にとって、水は重要であり、枯れない水源は精霊の住む場所として、みだりに近づけないようにする必要もある。虹蛇伝説が、オーストラリアのアボリジニーに最も広く信じられたのは、苛酷な乾燥にあつて水の有無が生命の維持に最大の影響を与えることであつたからである。

オーストラリアの自然は、‘dreaming’の母体である。ゆえに、Judith Wrightは、お互い、古き良き時代に帰ろうと誘う。

Let us go back to that far time
I riding the cleared hills,
plucking blue leaves for their eucalypt scent,
hearing the call of the plover,

in a land I thought was mine for life.⁵⁾

詩人は白人移民の子孫として、この場所は己が生きて我が土地と思う。オーストラリア独自の植栽であるユーカリの青みを帯びた葉を摘み、河原の千鳥の呼び声を聞く。エデンの園のような‘dreamtime’ (the easy Eden-dreamtime)によって、さまざまな鳥と多くの木立に囲まれた国の中で、自分はアボリジニーであるKathに対して、陰のように寄り添う姉妹になったと思う。

しかし、このように神話と伝説に護られたアボリジニーも、白人移民と彼らが持ち込んだものに対抗することは不可能であつた。JudithとKathの二人にとつても、互いを隔てる、越えがたい壁である歴史的現実と結果が

あった。A knife's between us(刃が私達の間にあった)という表現が、連を越えて2回繰り返されることから、恐怖と罪、死と搾取、等をはじめ、ネガティブなさまざまな側面を映しながら光る、ナイフのような鋭い刃が象徴するものは限りなく暗い。

イギリス移民の子孫であるJudith Wrightと、アボリジニーの出身であるKathの相違は、宿命の一つまり、個人としての意志や努力とは無関係に人生に宿っているものの一であった。

I am born of the conquerors,
you of the persecuted,
Raped by rum and an alien law,
progress and economics,

are you and I and a once-loved land
peopled by tribes and trees;
doomed by traders and stock exchanges,
bought by faceless strangers.⁶⁾

詩人は、征服者の子孫として生まれた者である。一方、アボリジニーの娘であるKathは、迫害された側に連なる。征服者達が原住民達に強いたものは、ラム酒、なじみのない法律、進歩と経済であった。しかし、それぞれの子孫である詩人とKath、そして多くの部族と森の大地が等しく、近現代の資本主義、つまり、商人や株取引の類に蹂躪される運命にあった。それらは、現代では、人間の顔を持つ征服者ではなく、「顔のない異邦人」である組織に買収されていったのである。アボリジニー及び移民として、内容はそれぞれ異なる‘dreaming’を持ちながら生きてきた人々は、この環境破壊の進む大地と同じく、原初的な‘dreamtime’を失っていった。

この詩の最終連で、詩人はお互いがそれぞれの‘dreamtime’を喪失した時に、お互いの霊的生命を失っていくと述べる。

But both of us dies as our dreamtime dies.
I don't know what to give you
for your gay stories, your sad eyes,
but that, and a poem, sister.⁷⁾

Kathが、詩人に語ってくれたアボリジニーの素朴で陽気な神話や伝説に対して、そしてアボリジニーの悲惨な歴史を繙く彼女の目に対して、詩人としてできること、つまり、一篇のこの詩を差し出すことしかできないと締めくくる。

Judith Wrightは、詩作の旨として、主義主張の行動が伴わない詩人ではなかった。‘Dreaming’と‘dreamtime’の価値やアボリジニーの権利回復を重要視し、そのために戦う姿勢を持ち、行動した。また、Queenslandの自然環境破壊に対して、州知事の方策に抗議した。

詩人に、多くの自らの文化を直接、口頭で語る機会を持ったアボリジニーのKath Walkerは、1960年代には、政治活動家として頭角を現し、アボリジニーの市民権獲得のために憲法修正のキャンペーンの中心的人物となった。同時に、作家として、アボリジニーの権利回復を著作で発表し続けた。1988年、彼女は、アボリジニーとしての名前Oodgerooに改名した。Oodgerooはpaperbark tree(メラレウカ)の意味を持っている。この木は、オーストラリア産のフトモモ科の木で、名前が示すとおり、はがれる紙のように樹皮が薄い。彼女は1993年に癌で亡くなったが、Judith Wrightとの交流は最期まで続いた。

Ⅲ. 白人の入植者としてのdreamtime

1. オーストラリアの自然と白人移民の dreamtime

「私は色満ちあふれる国に生まれた(I was born into a coloured country)」と、同詩集*Alive*の中の詩“Reminiscence”の冒頭で誇り高く詠ったJudith Wrightは、白人移民の第5世代目として、アボリジニーとは異なる視点でオーストラリアの自然を愛した女性詩人であった。

I was born into a coloured country;
spider-webs in dew on feathered grass,
mountains blue as wrens,
valleys cupping sky in like a cradle,
christmas-beetles winged with buzzing opal;
finches, robins, gang-gangs, pardalotes,
tossed the blossom in its red-streaked trees.⁸⁾

Judith Wrightの詩には、視覚に訴える技巧が多く使われている。これらの詩行では、オーストラリアに特有の色彩鮮やかな自然について、①直喩や隠喩で鮮明さを増幅させているもの、②鮮やかな色彩を持つ生き物を描いて、複合的に色の混在と鮮やかさをイメージさせているもの、等が見られる。①としては、修飾語になっている語がイメージを広げているもの(「羽毛のような柔らかな草にかかる蜘蛛の巣には露が輝き」)、色や形状が特定の鳥や物に喩えられているもの(「ミソサザイのような青い山々」, 「揺りかごのように空をお碗型に受けている谷」)がある。②の例としては、虫(「音を立てて、オパール色の羽を動かしているオーストラリア大陸特有のクリスマス・ビートル」)鳥類(「オーストラリア南東部に生息するアカサカオウム等が、赤いボトルブラッシュの蜜を吸うために、その花を持ち上げている」)になっている。

詩人が詩に写し取る人間像には、時として、自然界のもののイメージを付与されており、白人移民達の姿と彼らの生活はオーストラリアの自然に同化している。詩人の父祖の地、オーストラリア東部New South Wales州のNew Englandは海岸地帯から約60kmほど内陸にあり、台地状の地形と急流の短い川により形成された峡谷や多くの滝がある。同じ*Alive*の中の詩である、“Falls Country”には、詩人の叔父と叔母の姿が、周囲の自然に解け合い、自然の精霊のような役割を付与されている。

I had an aunt and uncle
brought up on the Eastern Fall.
They spoke the tongue of the falls-country,
sidelong, reluctant as leaves.
Trees were their thoughts:⁹⁾

New EnglandのArmidaleに、一族の拠点を置いたWright家の人々の生活と人生は一種の神話化を経て、木と葉のイメージで描かれている。つまり、白人移民の‘dreaming’である。

Listen. Listen,
latecomer to my country,
sharer in what I know

eater of wild manna.

There is
there was
a country

that spoke in the language of leaves.¹⁰⁾

日本語でも言葉という漢字に「葉」という文字が入っているように、最終行の‘the language of leaves’には、人間が時空を越えて、自然に模倣しつつ、独自のものを作り出していった事実も暗示されている。そして、「遅れてやってきた者」、「事物を分かち合う者」、そして、「自然の恵みを食べる者」達が、聞こえてくる言葉に耳を澄ませつつ、「植物の葉が言葉であった国が今も昔もあること」を知るようにと、詩人は語る。

2. “For a Pastoral Family” に語られる白人移民のSagaとしてのdreaming

“For a Pastoral Family”は、Judith Wrightの第11番目の詩集、*Phantom Dwelling* (1985)に収められた詩である。*Phantom Dwelling*と言う表現は、日本の江戸時代の松尾芭蕉(1644-94)が、句集『奥の細道』の旅から帰り、1690年4月6日から7月23日までの約4ヶ月間住んだ庵の名前の英語訳である。場所は、滋賀県大津にあり、芭蕉が47才の時のことであった。そこでの生活や思索などは『幻住庵の記』に記されている。幻住とは、その一文、「楽天は五臓の神を破り、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひさしからざるも、いづれか幻の住みかならずや」に由来する。

Judith Wrightは、この詩集の詩作品を書いている当時、日本に滞在していた娘のMeredithから、芭蕉についての知識を得ていた。この頃は、詩人としての言葉の実験、つまり、語る内容のテーマにより適した詩型を、異なる文化圏に求めていた時期でもあった。詩と言葉は、その文化圏の文化全体に関わるので、単に詩型を借用しても、英詩として適したものになるとは言い難い。しかし、Judith Wrightは、収録した詩、“Dust”の一節に、芭蕉のこの幻住という概念を紹介している。なお、詩型はアラビア・ペルシャの叙情詩型Ghazalで、5～12の2行連句から構成されるものである。

In my sixty-eighth year drought stopped the

song of the river,
sent ghosts of wheat fields blowing over the sky.

.....

Poems written in age confuse the years.

We all live, said Basho, in a phantom
dwelling.¹¹⁾

詩人が68才になった年、干ばつのために川の水が消え、水音という川の歌が止まった。代わりに、畑の枯れた小麦の葉などが亡霊のように風に吹かれて、空を舞っている。・・・自作の詩を見ても、老齢に書かれた詩には、年月についての記憶が定かでない。芭蕉曰く、「我々は皆、幻影に囲まれた世界に生きている」からだ。

しかし、オーストラリアの白人移民の子孫として、そして、New Englandという、田園の一地方の名士になった一族の開拓の歴史と凋落の予兆を詩に昇華するため、詩人は、長詩“*For a Pastoral Family*”に、白人移民の一族の詩的サーガとしてのdreamingを試みている。この全142行の構成は、6部（I To My Brothers, II To My Generation, III For Today, IV Pastoral Lives, V Change, VI Kinship）になっている。

Judith Wrightのオーストラリアにおける、父方の祖先は、5代前のGeorge Wyndhamである。彼は、1828年に故国イギリスのWiltshireのDintonから、オーストラリアのNew South Walesにやって来た。そして、荒地や森ではあったが、知事から与えられた土地を20人の囚人とともに開墾し、葡萄と小麦を生産する有名な農園“Dalwood”を造り上げた。その後、家族とともに、北西部のNew England Tablelandへ移り、その台地が、子孫の定住地となったのである。そこには原住民アボリジニーの部族が住んでいたが、Georgeと白人達は、彼らから土地と家畜を奪った。

そして、裕福な農場主になった一族の3代目の女性Mayが、同じく白人移民のスコットランド系のAlbert Wrightと結婚した。彼女の孫がJudithである。Mayは所謂‘strong woman’であり、その強さは、Judithの父Philipに、家や伝統への誇りと忠実さとして伝わった。1913年、彼はEthel Biggと結婚し、1915年Judithが誕生した。数年後、二人の弟も生まれた。母方のBigg家もイギリスの中産階級出身であり、1857年にオーストラ

リアに移民として到着している。Judithは、母方の牧場‘Thalgarrah’で生まれたが、Wright家も広大な牧場‘Wallamumbi’を所有していた。父Philipは、イギリスの肉牛種Herefordの飼育と販売を中心とした裕福な牧畜業者ではあったが、同時にこの地方の名士として、オーストラリア食肉業界役員や他の業界の会社社長を勤めた。また、The University of New Englandの創設者の一人であり、1960年から10年間、総長にもなっている。

父方も母方も、直面した状況や時代の波による紆余曲折はあったにせよ、Veronica Bradyも指摘しているように、Judith Wrightは、開拓と力と繁栄の結果としての牧歌的な伝統の中に生を受けたのである。

So Judith Wright was born into the heart of the pastoral tradition, one of settlement, energy, and prosperity, though a prosperity won against the odds.¹²⁾

“*For a Pastoral Family*”は、白人移民の過去の歴史と、詩人が生きる20世紀のオーストラリアの現在が詩人の視点で語られるという構成である。

第一部 To My Brothersでは、その牧歌的伝統の中で育てられたものの、時代の流れと現代の資本主義による変化の中にいる、今は年老いた弟達に宛てて語る形式である。詩人の語りは、現在の時の中に過去の歴史を神話的に浮かび上がらせる手法になっている。経済的利益を追求する時勢を皮肉っぽい筆致で記した後、詩人は田園の静けさ、何マイルも続く谷と丘、融資する銀行家の用心深い丁寧さなど、まだ贅沢さは残ってはいるが、その贅沢さは祖先達の開拓の労苦によるものである、と述べる。さらに、自分達一族の繁栄の礎となった土地は、土地所有の概念も文字も持たない原住民アボリジニーから略奪したのものであるとも言う。

Well, there are luxuries still,
including pastoral silence, miles of slope and hill,
the cautious politeness of bankers. These are owed
to the forerunners, man and women
who took over as if by right a century and a half
in an ancient difficult bush. And after all

the previous owners put up little fight,
did not believe in ownership, and so were
scarcely human.¹³⁾

そして、この国で食べられる葉の縁をかじった、つまり、豊かな自然の実りのわずかでも手に入れた、彼女の父祖達は子孫に行動の自由と鄙びた地での安全さを残し、詩人には詩の源泉を与えてくれた。

Our people who gnawed at the fringe
of the edible leaf of this country
left you a margin of action, a rural security
and left to me
what serve as a base for poetry,
a doubtful song that has a dying fall.¹⁴⁾

しかし、詩人が詠うべき詩は、「水が枯渇しかかった一本の滝がある、危うい詩」であり、白人移民の子孫が認めざるをえない父祖の罪の苦さが示されるものでもある。同時に、資本主義経済の進行による、オーストラリアの環境破壊をも示唆するものでもある。

次のII To My Generationでは、全体の構成に司法のイメジャリーが多く使用されている。内容は、同世代の者に向けての表明というより、同世代の者が持つ、過去の歴史と現在への欺瞞的態度への風刺である。曰く、一 祖先の罪は、眼前のものでもなく、自分達が生まれる前のことであり、語られていなかったから、自分達は「無罪」(Not Guilty)である。父祖の行為は故国(the Old Country)のためであり、我々は故国から追放された囚人でもない。世代的正当性があり、司法はそれを全て認めている。つまり、結論として、我々の世代は、市場論理で脅かされても、それが生産物であれ詩であれ、過去の遺産で十分にやっつけていけると信じているのである。一このような年老いた同年代の欺瞞と自己過信は、III For Todayにおける、現代の商業主義の大きな流れの前には危うく映る。

III For Todayでは、大都市のみならず、地方まで発展の道筋をつけようとする商業主義の代表である大企業が、一種の脅威となっている現代が描かれる。「決して満腹にならない胃袋を持つ大企業」(the great

corporations / whose bellies are never full)が、我々の予想を超えて大きくなり、資本の力で我々の土地を奪うかもしれない。父祖達の恐れは異なっていた。

The fears of our great-grandfathers—
apart from a fall in the English market—
were of spearwood, stone axes.¹⁵⁾

それは、故国イギリスの市場での暴落であり、オーストラリアの荒れ地に生える灌木やアボリジニーの石斧であった。つまり、荒れ地や原住民の攻撃であった。一方、今日では、ラジオによるアメリカやソ連で開催される展示会での家畜の価格に恐れを持つ。

この詩のタイトルにも使われているpastoralという語が小見出しのタイトルにも表れている第四部、IV Pastoral Lives では、故国イギリスの慣習に沿ったJudith Wrightの田園生活が回想形式で語られる。詩人の一族は「高慢な氏族」(arrogant clan)として、家庭内外の教育、地域貢献を重要視した。

Yet a marginal sort of grace
as I remember it, softened our arrogant clan.
We were fairly kind to horses
and to people not too different from ourselves.
Kipling and A.A.Milne were our favourite authors
but Shelley, Tennyson, Shakespeare stood on
our shelves—
suitable reading for woman,
to whom, after all, the amenities had to be
left.¹⁶⁾

一族の高慢さは、家畜の馬に対してかなり優しく、また自分達とあまり異ならない人々には親切であったこと、家に揃えた本などによって明らかである。イギリス系移民としての矜持を詩人は列挙している。まず、父が、その地域の大学の創立者の一人であったこと、次にイギリス人と同じくウィットに価値をおいたこと、また、イギリスの親族を訪問した時にはオーストラリア人としての、「独立精神」を持って臨んだこと、そして、英国国教会に属する者として、教会では募金皿を回しながら、相

応の寄付を入れた。自分達よりも優れた者はおらず、多くの人間がますます悪くなっているのを知っていたからである。

しかし、イギリスに目を向け続ける者が、オーストラリア独自の時代の流れに乗っていくことは限界があった。V Changeでは、他の部とは異なり、1行の語数が少なくなり、急激な変化を示すリズムに代わっている。それは、経済の中心が、産業の生産地であるcountryから、流通を主体にするcityに移ったことを意味している。都市は工場と化学の煤で黒みを帯び、それとともに、一族の繁栄には陰りが見えてくる。ここで、詩人はアイルランドのケルト文化とケルトの民を詩に記したW.B. Yeatsの“The Fisherman”に言及し、凋落した彼と自分の一族と重ね合わせている。

VI Kinshipには、彼女の兄弟への想いや過去への郷愁、そして、何よりも詩人が愛したオーストラリアの自然が、色彩豊かで叙情的かつ感覚に訴える手法で描かれている。詩人がまだ子どもだった頃、夏の「早朝の谷に降りてくる、青みがかったかすみ」(Blue early mist in the valley)の中で、果樹園のアプリコットが赤く色づき、馬が農園の構内で飛び跳ね、周囲には家畜や汗、鞍の皮の臭いが立ちこめていた。ユーカリの木から立ち上るとされている油性分が、山々を青く見せている上方で、紺碧の空が広がっていた。皆、若く素朴だったので、どんな天気でも元気で、馬の群れを家まで連れ戻したものだ。

All those sights, smells and sounds we shared
trailing behind grey sheep, red cattle,
from Two-rail or Ponds Creek
through tawny pastures breathing pennyroyal.
In winter, sleety winds bit hands and locked
fingers round reins. In spring, the wattle.¹⁷⁾

兄弟は皆、同じ光景、匂い、音を共有しつつ、灰色の羊や赤褐色の牛の後を追ひ、バニロイヤルハッカの芳香を嗅ぎながら、乾燥のために黄褐色になった牧場を通ったものだった。冬には、みぞれ交じりの風が吹いて、子ども達は指を手綱から離せなかった。春になると、ワトルの黄色い花が咲いた。ワトルは、アカシア科でオースト

ラリアの国花である。

詩人や兄弟2人は、過去の思い出を分かち合えるため、お互いを許し合う。彼らは、今は既に年老いているが、思い起こすのは、「蛇が潜む茂った草叢を無頓着に走ったり、黒っぽいジャージー種の雄牛用のパドックで見張りを忘れてたりしている、裸足の子ども」(a barefoot child running careless through / long grass where snakes lie, or forgetting / to watch in the paddocks for the black Jersey bull)時代の姿である。そして、

Divisions and gulfs deepen
daily, the world over
more dangerously than now between us three.
Which is why, while there is time(though not
our form at all)
I put the memories into poetry.¹⁸⁾

つまり、自分達3人にとって、自然の境界線も湾も深くなり、世界は今より危険なものになるため、事物や由来などについて、時間がある間に記憶を詩に織り込んでいこうと締めくくっている。

IV. 終わりに

オーストラリアの原住民アボリジニーの「創世期」(‘dreamtime’)と「創世神話」(‘dreaming’)は、Judith Wrightにとって、オーストラリアの自然に密着した文化遺産であり、詩の源泉でもあった。Kath Walkerという、アボリジニーの友人を得て、原住民達が原初的な意味を付加した万物、つまり土地、季候、動植物、そして人間像は、独自のイメージを持って、彼女の詩の世界の中に再生された。

同時に、この地に生命の糧を求めて、故国イギリスから渡来した白人移民の第5世代として、父祖の入植の時代が、彼女にとっての「創世期」(‘dreamtime’)であった。そして、彼女の詩にこそ、白人移民の「創世神話」(‘dreaming’)的な語りやイメージ形成が結実していると思われる。

しかし、Judith Wrightは、詩作にのみ一生を送った

人間ではなかった。アボリジニーの権利回復のため、そして、オーストラリアの自然環境を保全するために、活動を続けた。1979年、有色人種の移民の原則排除、原住民アボジニーを含む在豪有色人種の社会的権利制限を主張する白豪主義は廃止された。

そして、2008年2月、ケヴィン・ラッド首相は、連邦議会において、アボリジニーへの謝罪動議を提出し、全会一致で採択された。首相は、過去のアボリジニー政策の誤りを認め、公式に謝罪したのである。それは、アボリジニーと白人移民の双方の‘dreaming’が異質のものでありながら、オーストラリアの文化において相補的な役割を果たしていくだろうということも期待できるものである。詩人Judith Wrightが、この世を去って、およそ8年後のことであった。

注

- 1) Judith Wright, *Collected Poems* (Angus & Robertson, 1994), p. 315.
- 2) Veronica Brady, *South of My Days: A Biography of Judith Wright* (Angus & Robertson, 1998), p. 260.
- 3) Judith Wright, *op. cit.*, p. 316.
- 4) *Ibid.*, p. 299.
- 5) *Ibid.*, p. 316-7.
- 6) *Ibid.*, p. 317.
- 7) *Ibid.*, p. 318.
- 8) *Ibid.*, p. 329.
- 9) *Ibid.*, p. 328.
- 10) *Ibid.*, p. 329.
- 11) *Ibid.*, p. 424.
- 12) Veronica Brady, *op. cit.*, p. 20.
- 13) *Ibid.*, p. 406.
- 14) *Loc. cit.*
- 15) *Ibid.*, p. 408.
- 16) *Loc. cit.*
- 17) *Ibid.*, p. 410.
- 18) *Loc. cit.*

参 考 文 献

- 1) Bennett, T. et. al. eds.: *Celebrating the Nation: A Critical Study of Australia's Bicentenary*. St. Leonards, Allen & Unwin (1992).
- 2) Brady, V.: *South of My Days: A Biography of Judith Wright*. Angus & Robertson, Auckland (1998).
- 3) Cathcart, M.: *Manning Clark's History of Australia*. Melbourne University Press, Melbourne (1993).
- 4) グリーブ, N., 加藤愛子 訳: 「フェミニズムとオーストラリア」, 勁草書房(1986).
- 5) Hampton, S. and Llewellyn, eds.: *The Penguin Book of Australian Women Poets*. Penguin Book Australia, Ringwood (1986).
- 6) Hergenhan, L. ed.: *The Penguin New Literary History of Australia*. Penguin Book Australia, Ringwood (1988).
- 7) Isaacs, J.: *Pioneer Women of the Bush and Outback*. Gary Allen, Smithfield (1990).
- 8) 石橋百代: 「オーストラリアの女性」, ドメス出版(1997).
- 9) Lever, S. ed.: *The Oxford Book of Australian Women's Verse*. OUP, Melbourne (1995).
- 10) マーチン, 古沢みよ 訳: 「オーストラリアの移民政策」, 勁草書房(1987).
- 11) Page, G.: *A Reader's Guide to Contemporary Australian Poetry*. University of Queensland Press, St. Lucia (1995).
- 12) Reed, A.W.: *Aboriginal Myths, Legends and Fables*. New Holland Publishers(2000).
- 13) Row, N.: *Modern Australian Poets*. OUP, Sydney (1994).
- 14) シェリントン, G., 加茂恵津子 訳: 「オーストラリアの移民」, 勁草書房(1985).
- 15) Strauss, J.: *The Oxford Book of Australian Love Poems*. OUP, Melbourne (1993).
- 16) Tranter, J. and Mead, P. eds.: *The Penguin Book of Modern Australian Poetry*. Penguin Books Australia, Ringwood (1991).
- 17) Walker, S.: *Flame and Shadow: A Study of Judith Wright's Poetry*. University of Queensland, St

Lucia (1991).

- 18) Wilde, W. et. al. eds.: The Oxford Companion to Australian Literature. 2nd Ed., OUP, Oxford (1994).
- 19) Wright, J.: Collected Poems 1942-1985. Angus & Robertson, Auckland (1994).
- 20) Wright, J.: half a lifetime. The text Publishing Company, Melbourne (2000).
- 21) Wright, J.: The Cry for Dead. OUP, Melbourne (1981).
- 22) Wright, J.: The Generation of Men. OUP, Melbourne (1959).